

買出し

永井荷風

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）間中あいだちゆう

／＼：二倍の踊り字）「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号（  
（例）思ひ／＼

\*濁点付きの二倍の踊り字は「／＼」

船橋と野田との間を往復してゐる総武鉄道の支線電車は、米や薩摩芋の買出しをする人より外にはあまり乗るものがないので、誰言ふとなく買出電車と呼ばれてゐる。車は大抵二三輛つながれてゐるが、窓には一枚の硝子もなく出入口の戸には古板が打付けてあるばかりなので、朽腐した貨車のやうにも見られる。板張の腰掛もあたり前の身なりをしてゐては腰のかけやうもないほど壊れたり汚れたりしてゐる。一日にわづか三四回。昼の中しか運転されないの、いつも雑沓する車内の光景は曇つた暗い日など、どれが荷物で、どれが人だか見分けのつかないほど暗淡としてゐる。

この間中あひだちゆう、利根川の汎濫した、め埼玉栃木の方面のみならず、東京市川の間さへ二三日交通が途絶えてゐたので、線路の修復と共に、この買

出電車の雑沓はいつもより亦一層激しくなつてゐた或日の朝も十時頃である。列車が間もなく船橋の駅へ着かうといふ二ツ三ツ手前の駅へ来かゝるころ、誰が言出したともなく船橋の駅には巡查や刑事が張込んでゐて、持ち物を調べるといふ警告が電光の如く買出し連中の間に伝へられた。

いづれも今朝方、夜明の一番列車で出て来て、思ひ／＼に知合ひの農家をたづね歩き、買出した物を背負つて、昼頃には逸早く東京へ戻り、其日の商ひをしやうといふ連中である。どこでもい／＼から車が駐り次第、次の駅で降りて様子を窺ひ、無事さうならそのまゝ乗り直すし、悪さうなら船橋まで歩いて京成電車へ乗つて帰るがい／＼と言ふものもある。乗つて来た道を逆に柏の方へ戻つて上野へ出たらばどうだらうと言ふものもある。やがて其中の一人が下におろしたズツクの袋を背負ひ直すのを見ると、乗客の大半は臆病風に襲はれた兵卒も同様、男も女も仕度を直し、車が駐るのをおそしと先を争つて駅のプラットフォームへ降りた。「どこだと思つたら、此処か。」と駅の名を見て地理を知つてゐるものは、すた／＼改札口から街道へと出て行くと、案内知らぬ連中はぞろ／＼その後へついて行く。

「いつだつたか一度来たことがあつたやうだな。」

「この辺の百姓は人の足元を見やがるんで買ひにくい処だ。」

「その時分はお金ばかりぢや売つてくれねえから、買出しに来るたんび足袋だの手拭だの持つて来てやつたもんだ。」

「もう少し行くとたしか中山へ行くバスがある筈だよ。」

こんな話が重い荷を背負つて歩いて行く人達の口から聞かれる。

十月初、雲一ツなく晴れわたつた小春日和。田圃の稲はもう刈取られて畦道あぜみちに掛けられ、畠には京菜と大根の葉が毛氈でも敷いたやうにひかつてゐる。百舌もずの鳴きわたる木々の梢は薄く色づき、菊や山茶花のそる

／＼咲き初めた農家の庭には柿が真赤に熟してゐる。歩くには好い時節である。買出電車から降りた人達はおのづと列をなして、田舎道を思ひ／＼目ざす方へと前かゞまりに重い物を負ひながら歩いて行く。その身なりを見ると言合せたやうに、男は襦袢ほろ同然のスエータか国民服に黄色の古帽子、破れた半靴。また草履ばき。年は大方四十がらみ。女もその年頃のものが多く、汚れた古手拭の頬冠り、つぎはぎのモンペに足袋はだしもある。中には能くあんな重いものが背負へると思はれるやうな皺だらけの婆ばさんばも交つてゐた。

やがて小半時も歩きつゞけてゐる中、行列は次第々々とぎれて、歩き馴れたものがどん／＼先になり、足の弱いものが三人四人と取り残されて行く。その中には早くも路傍の草の上に重荷をおろして休むものも出て来るので、同じやうな身なりをして同じやうな荷を背負つてゐても、暫くの中に買出電車から降りた人だか、または近処の者だか見分けがつかないやうになつた。

道しるべの古びた石の立つてゐる榎の木蔭。曼珠沙華の真赤に咲いてゐる道のとある曲角に、最前から荷をおろして休んでゐた一人の婆さんがある。婆さんは後から来て休みもせずどん／＼先へと歩いて行く人達の後姿をぼんやり見送つてゐたが、すぐには立上らうともしなかつた。するとまた後から歩いて来た、それは四十あまりのかみさんが、電車の中での知合らしく、婆さんの顔を見て、

「おや、おばさん、大抵ぢやないね。わたしも一休みしやうか。」

「もう何時だらうね。」と婆さんは眩しさうに秋晴の日脚を眺めた。

「追ツつけもうお午ひるでせう。わるくするとこの塩梅ぢや、今日はあふれだね。」

「線路づたひに船橋へ行つた方がよかつたかも知れないね。」

「わたしやさつぱり道がわからないんだよ。おばさんは知ってるのかなね。」

「知ってるやうな気もするんだよ。知ってるたつて、たつた一度隣組の人と一緒に来たんだから、どこがどうだか、かいもく分りやアしない。久しい前のことさ。戦争にやなつてゐたが、まだ空襲にやならなかつた時分さ。」

「戦争になつてから、もう十年だね。戦争が終つてもこの様子ぢや、行先はどうなるんだらう。買出しも今日みたやうな目にあふと全く楽ぢやないからね。」

「全くさ。お前さんなんぞがそんな事を言つてたら、わたしなんぞ此年になつちや、どうしていゝか分りやアしない。」

「おばさん、いくつになんなさる。」

「六十八さ。もう駄目だよ。ついこの間まで六貫や七貫平気で背負<sup>しよ</sup>へたんだがね。年にや勝てない。」

「さうですか。えらいね。わたしなんぞ今からこれぢや先が思ひやられます。」

「その時にや若いものがどうにかしてくるよ。息子さんや娘さんが黙つちやアゐないから。」

「それなら有り難いが、今時の倅や娘ぢや当にやなりません。道端で愚痴をこぼしてゐても仕様がな。大分休んだから、そろ／＼出かけませうか。」

かみさんらしい女がズツクの袋を背負ひ直したので、婆さんも萌葱<sup>もえぎ</sup>の大風呂敷に包んだ米の袋を背負ひ、不案内な田舎道を二人つれ立つて歩きはじめた。

「おばさん。東京はどこです。本所ですか。」

「箱崎ですよ。」

「箱崎は焼けなかつたさうですね。能うございましたね。わたしは錦糸町でしたからね。生命いのちからがら、何一ツ持ち出せなかつたんですよ。」

「わたしもさうですよ。佐賀町で奉公してゐましたから。着のみ着のまですよ。上の橋の側に丸角さんて云ふ瀬戸物の問屋さんがあります。そのお店の賄まかなひをしてゐたんですがね。旦那も旦那もなくなつたんですよ。わたし見たやうな、どうでもいゝものが焼やけど一ツしないで助たすつて、ねえ、お前さん、何一ツ不自由のない旦那方があの始末だからね。人の身の上ほどわからないものはないと、つく／＼さう思ふんだよ。」

「おや、正午おひるぢやないかね。あのサイレンは。」とおかみさんはさして遠くもないらしいサイレンが異つた方角から一度に鳴出すのを聞きつけた。婆さんは一向頓着しない様子で、頬冠の手拭を取つて額の汗をふきながら、見れば一歩ひとあし二歩ふたあしおくれながら歩いてゐる。

「そこいらで仕度をしやうかね。いくら急いだつて歩けるだけしきや歩けないからね。」

おかみさんは道端に茂つてゐる椿の大木の下に破こぼれた小さな辻堂の立つてゐるのを見て、その砌せきに背中せなかの物をおろした。あちこちで頻に鶏が鳴いてゐる。婆さんもその傍に風呂敷包をおろしたが、何もせず、かみさんが握飯の包を解くの見ながら黙つてゐる。

「おばさん、どうした。」

「わたしはまだいゝよ。」

「さう。それアわるかつたね。わたしや食ひしんばうだからね。」

「かまはずにおやんなさい。わたしや休んでるから。」

おかみさんは弁当の包を解き大きな握飯を両手に持ち側目わきめもふらず貪り初めたが、婆さんは身を折曲しやがげ蹲しゃがんだ膝を両手に抱込んだまゝ黙つ



てゐるのに気がつき、

「おばさん、どうかしたのかい。気分でもわりいかい。」

一向返事をしないので、耳でも遠いのか、それとも話をするのが面倒なのかも知れないと、おかみさんは一ツ残した握飯をせつせと口の中へ入れてしまひ、沢庵漬をばり／＼、指の先を嘗めて拭きながら、見れば婆さんはのめるやうに両膝の間に顔を突込み、大きな軒をかいてゐるので、年寄と子供ほど呑気のんきなものはない。処嫌はず高軒で昼寐をするとも思つたらしく、

「おばさん。起きなよ。出かけるよ。」と言つたが一向起きる様子もないので、袋を背負ひ直して、もう一度、「ぢや先へ行きますよ。」

その時、婆さんの身体が前の方へのめつたので、おかみさんは初て様子をかしいのに心づき、後うしろから抱き起すと、婆さんはもう目をつぶつて口から泡を吹いてゐる。

「おばさん。どうしたの。どうしたの。しつかりおし。」

婆ばアさんの肩へ手をかけて揺ぶりながら耳に口をつけて呼んで見たが、返事はなく、手を放せばたわいなく倒れてしまふらしい。

あたりを見まはしても、目のとゞくかぎり続いてゐる葱と大根と菠薐はつれん草そうの畠には、小春の日かげの際限なくきらめき渡つてゐるばかりで人影はなく、農家の屋根も見えない。馬力ばりきが一台来かゝつたが二人の様子には見向きもせずに行つてしまつた。おかみさんはふとこの間あひだ、隣に住んでゐる年寄が洗湯からかへつて来て話をしてゐる中にころりと死んでしまつた其場の事を思出した。

「やつぱりお陀仏だ。」

暫くあたりを見廻してゐたが、忽ち何か思ひついたらしく背負ひ直したズツクの袋をまたもや地におろし、婆さんの包と共に辻堂の縁先まで

引摺つて行き、買出して来た薩摩芋と婆さんの白米とを手早く入れかへてしまつた。その頃薩摩芋は一貫目六七十円、白米は一升百七八十円まで騰貴してゐたのである。

おかみさんは古手拭の頬冠を結び直し、日向の一本道を振返りもせず、すた／＼歩み去つた。

道はやがて低くなつたかと思ふとまた爪先上りになつた其行先を、遙向うの岡の上に茂つた松林の間に没してゐる。その辺から牛の鳴く声聞きこえる。おかみさんは息を切らさぬばかり、追はれるやうに無暗と歩きつゞけたので、総身から湧き出る汗。拭いても拭いても額から流れる汗が目に入るので、どうしても一休みしなければならぬ。今からあまり無理をすると此方も途中でへたばりはしまいかと思ひながら、それでも構はず、時には轍の跡につまづきよるめきながらも、向に見える松林を越すまでは死んでも休むまいと思つた。おかみさんは振返つて自分の来た道が一目に見通される範圍に、その身を置くことが一步步々恐しく思はれてなくなつたのだ。倒れたら四ツ這ひになつて這はうとも、一まづ向に見える松林の彼方まで行つてしまひたくてならない。

彼処まで行つてしまひさへすれば、松林一ツ越してさへしまへば、何の訳もなく境がちがつて、死人の物を横取りして来た場所からは関係なく遠ざかつたやうな気がするだらうと思つたのだ。行き合ふ人や後から来る人に顔を見られても、彼処まで行つてしまへば何処から来たのだから分るまいと云ふやうな気がするのである。

この心持は間違つてはゐなかつた。やつとの事、肩で息をしながら坂道を登りきつて、松林に入り小笹と幹との間から行先を見ると、全く別の処へ来たやうにあたりの景色も、木立の様子も、気のせいかさつきり變つてゐる。畠の作物もその種類がちがつてゐる。茅葺の農家のみなら

ず、瓦葺の二階建に硝子戸を引き廻した門構の家も交つてゐる。松林中は日蔭になつて吹き通ふ風の涼しさ。おかみさんはほつと息をついて蹲しゃがみかけると、背負つた米の重さで後に倒れ、暫くは起きられなかつた。

その時自転車に乗つた中年の男が同じ坂道を上つて来て、おかみさんの身近に車を駐めて汗を拭き巻煙草に火をつけた。おかみさんはそれとなく其男の様子を見ると、これから買出しに行くものらしく、車の後には疊んだズツクの袋らしいものを縛りつけてゐる。おかみさんは恐る／＼、

「旦那、何かお買物ですか。」と話しかけた。

「駄目だよ。こちらの手によおへないよ。」

「売惜しみをしますからね。容易なこツちやありません。」

「全くさね。それにお米ときたらとても駄目だ。いゝなり放題お金の外に何かやらなければア出しさうもないよ。」

「わたしもさんざ好きなことを言はれたんですよ。それでもやつと少しばかり分けて貰ひました。」

「この掛合は男よりも女の方がいゝやうだね。一升弍百円だつて言ふぢやないか。うそ見たやうだ。」

「東京へ持込めば、旦那、処によるともつと値上りしますよ。御相談次第で、何なら、お譲りしてもいゝんですよ。」

「さうか。それア有りがたい。何升持つてゐる。」  
「一斗五升あります。持ち重りがするんでね、すこし風邪は引いてますし、買つておくんなさるなら、願つたり叶つたりです。」

「ぢや、おかみさん。一升百八十円でどうだ。」

「その相場で買つて来たんですから、旦那、五円づゝ儲けさして下さい



よ。」

男はおかみさんの袋を両手に持上げて重みを計り、あたりに一寸いちゆん気を配りながら自転車の後に縛りつけた袋と、棒のついた秤はかりとを取りおろした。

取引はすぐに済んだ。

おかみさんは身軽になつた懷中に男の支払つた札束をしまひ、米を載せて走り去る男の後姿を見送りながら松林を出た。林の中には小鳥が囀り草むらには虫が鳴いてゐる。

底本：「ふるさと文学館 第一三巻 【千葉】「ぎょうせい

1994（平成6）年11月15日初版発行

入力：H・YAM

校正：米田

2011年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあつたのは、ボランティアの皆さんです。